

房総の里山から世界を覗く



私たちの故郷・日本列島はユーラシア大陸の環礁、太平洋に面した（文明史的には極東の）島国です。地球の4つのプレート（ユーラシアプレート、北米プレート、太平洋プレート、フィリピン海プレート）が重なりあう地震の多い、季節風が日本海の水蒸気を吸いあげて多雨を降らせ、太平洋上で発生した台風が直撃する、四季のある列島。

市原市は東京湾を囲む温順な房総半島にある、首都のベッドタウン、日本有数の工業地帯、田畑のある里山を持った地域です。戦後75年を迎える現在、南部の里山は過疎高齢化により地域力の減退が著しく、コミュニティ形成上必要な最少限の人口をも割りかねない状況になってきました。小中学校の統廃合も増えています。

翻（ひるがえ）って東京を中心とした大都市では季節感のない高層の均質空間が林立し、束の間の刺激と競争に追われ続け人間同士のつながりが希薄になり、多くの人はロボットのような生活に疑問を持ち始めています。

土地とそれを含む社会の中に、土地と深く結びついた作業を行い、そこから一筋（いちりゅう）の旗をあげようと、房総里山芸術祭は構想されました。

自分が生きる場所

アーティストたちは、その土地の特色を直観的につかめます。土地を知り、学び、そ

の特色を活かすべく作品を制作します。それを土地の人々、サポーターとともに作り上げます。その作品に魅（ひ）かれて観客が集まって来る。地域の人にとっては当たり前のこと、ときには辛いことであっても、アーティストやその作品を通して見みると、素晴らしい、価値ある普遍的なものだとわかってきます。その観客の感動が地元の人々に伝わり、生きる誇りとなるのです。

いま、日本の各地で芸術祭が盛んになっています。地球環境の悪化がのびきりなくなり、効率第一の経済性だけが追求されるなか、政治も外交も見通しを持たない。人は、せめて自分が生きている場所だけでもよくしていきたい、そんな頑張りを実践しているところに行ってみたいと思うのではないのでしょうか。そのとき美術は、自然の一部である人間の、自然との関わりのある方を示すものとして生きてきます。いちはらアート×ミックス2020は、その資源を公共のものとするべく、この春、房総半島の市原市にて開催されます。

災害からの復興

「アート×ミックス」とは、音楽・芝居・ダンス・スポーツ・食などの生活文化、身体活動、コミュニケーションを、アートを触媒としてつなぎ、地域の特色を確認し協働し発表することを意味します。アート×○○○というタイトルをつけた由縁

です。 地域の人々の参加も大切ですが、それだけでは過疎の地域の展望はもちえません。力のあるアーティストが関わり、面白い仕組みや試みの中で人をつなぎ、外部の人たちがそれを観て、参加できる芸術祭にしなければなりません。

昨年秋に市原市は、台風15号、19号、10月25日の大雨という災害に見舞われました。今回のいちほらアート×ミックス2020は、市原という土地の特色を掘りおこし、その特性を鍛え、養老川とそれに並行して1917年から地域とともに歩んできた小湊鉄道の再建を軸に進めることにしました。小湊鉄道は単線で五井駅から上総中野駅まで18駅あります。無人駅もありますが、そのホームはじつにさっぱりしていて親しみがある。通勤・通学と地域の人たちとともにあり続けてきた鉄道のよさがあるのです。また小湊鉄道五井機関区には、鍛冶屋場や古い機関車や引込線があって、鉄道の延伸とともに元気になっていった日本の地域や、蒸気機関車とともに成長していった初期の産業革命の息吹が感じられるめずらしい場所です。それはまさに子どもたちの夢の世界でもあるのです。

夢いっぱいの冒険

五井駅から列車に乗って出発しましょう。月に近づこうとするインスタレーションがあったり、ファッションの店があったり、流れ星が駅舎に飛び込んでいたり、お豆腐屋さんがあったりする各駅から、市原の各施設の娯（たの）しい空間に行くのです。

科学部屋や芝居じみた映画館や街の記憶

の部屋がある商店街。不思議な梯子や、灯りをともすミニチュア、昆虫柄ドレス、2ヶ月かけて動く車輪、原始の音が聞こえる教室などがある学校、中国文明の基になった紙の展示をする美術館、写真や紙人形、花、玩具など女性アーティストたちのアトリエが集合したラジオ放送局つきの保育所、おにぎりのための運動会が開かれるグラウンド、その校舎にはミシュランシェフのレストランや房総半島ゆかりの和菓子が並んでいます。モグラくんもいるよ。さらに手掘りのトンネルの奥には食べものからお芝居までみんな揃った別世界のような学校もある。

それらを巡る旅は摩訶不思議な世界一周のような驚きと喜びがあり、養老溪谷駅に着く頃には、そこから宇宙に飛び出したいような気分になることでしょう。帰りは各駅停車でゆっくりと帰ってこられるし、列車内では喜怒哀楽、鉄道とともに生きた私たちの故郷のお芝居が見られます。

アートに関わるいろいろな楽しい事柄に呼びかけていたら17の国と地域から人々が参加し、70を超える異なった空間ができました。地球環境が厳しくなり、なんでも効率一辺倒、記号だらけで平均的になっていく世の中であって、房総の里山に明るい、楽しい、好奇心ある冒険いっぱいの窓をあけます。



総合ディレクター

北川 フラム

Photo by Mao Yamamoto